

# 横堀遺跡出土の条痕文期土偶

野代恵子

- 1 はじめに  
3 横堀遺跡の土偶とその類例

- 2 遺跡の概要  
4 おわりに

## 1 はじめに

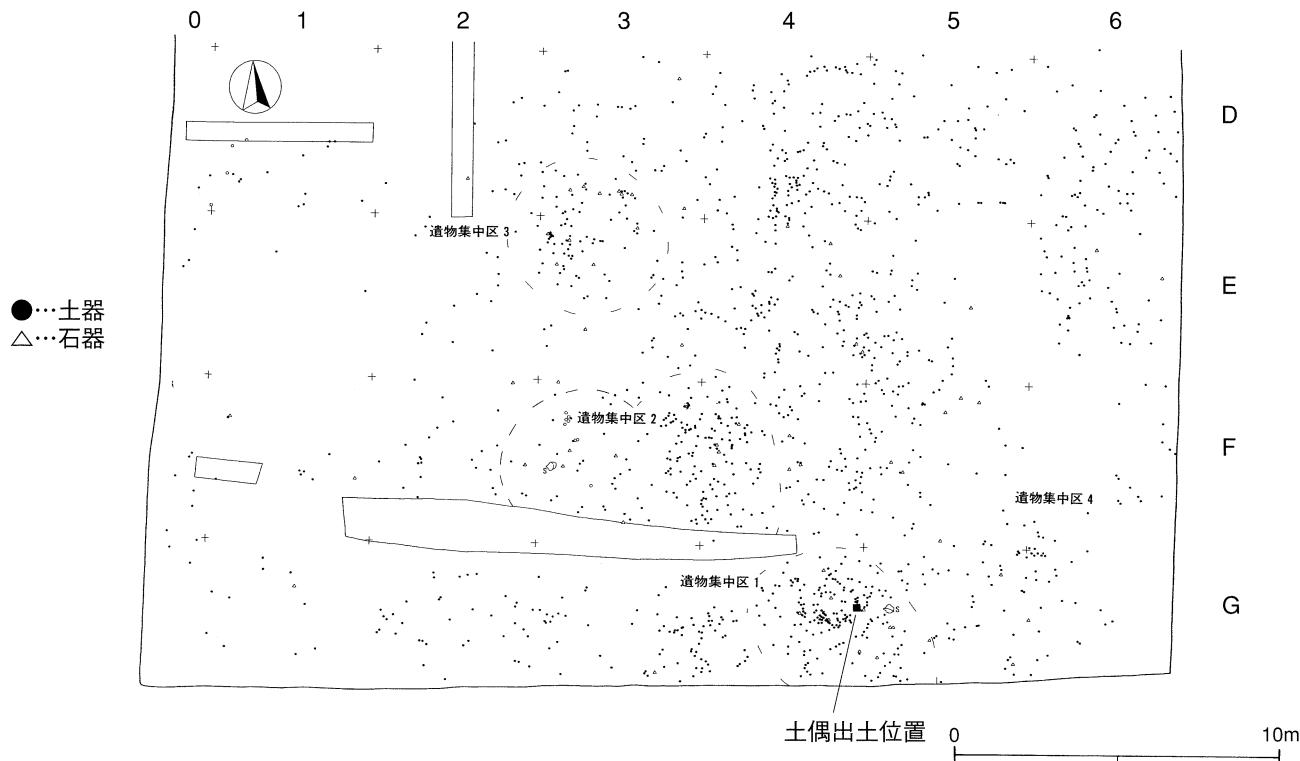
横堀遺跡は南アルプス市在家塚（旧白根町）に所在する縄文時代晚期最終末～弥生時代中期にかけての遺跡である。発掘調査は中部横断自動車道白根インターチェンジ建設に伴う事前調査として平成11年度に行われ、調査報告書は平成12年度にすでに刊行されているが、ここで報告した遺物の中に縄文時代晚期最終末～弥生時代前期初頭に属する土偶の一部が含まれていることがわかったため、この場を借りて訂正し報告したい。

## 2 遺跡の概要

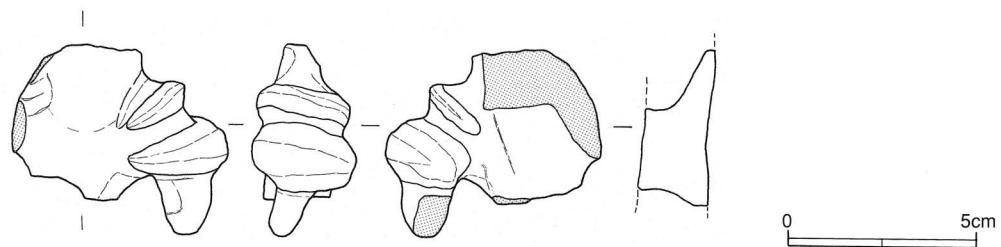
旧白根町は全国でも有数の巨大な扇状地に位置している。横堀遺跡もこの扇状地上に立地している訳であるが、遺跡が営まれた縄文時代晚期最終末～弥生時代中期にかけ

ては一時的に水域から分離され、安定した土地が形成されたものと考えられる。遺構面は地表下約3.5～4.0mほどのところにみられる黒褐色粘質土を基本としており、標高はおよそ328mを測る。この層より上には厚い堆積層が幾重にも重なって堆積し、これ以降については安定した生活面は遺存していない。

遺跡の細別時期については、縄文時代晚期最終末～弥生時代前期にあたる土器群を主なものとして、その他にもごくわずかながら弥生時代中期中葉に属すると考えられる土器が含まれている。前者については、中部高地においては氷式の最も新しい段階にあたり、また東海地方では樅王式に位置づけられる。山梨県内においては宮ノ前遺跡（韋崎市）の2号水田下層の土器群とほぼ同じ様相を示すもので、宮ノ前1期（中山1992）にあたる。出土土器の示す時期



第1図 横堀遺跡遺物出土状況（調査区 南半分）



第2図 横堀遺跡出土土偶 (S = 1/2)

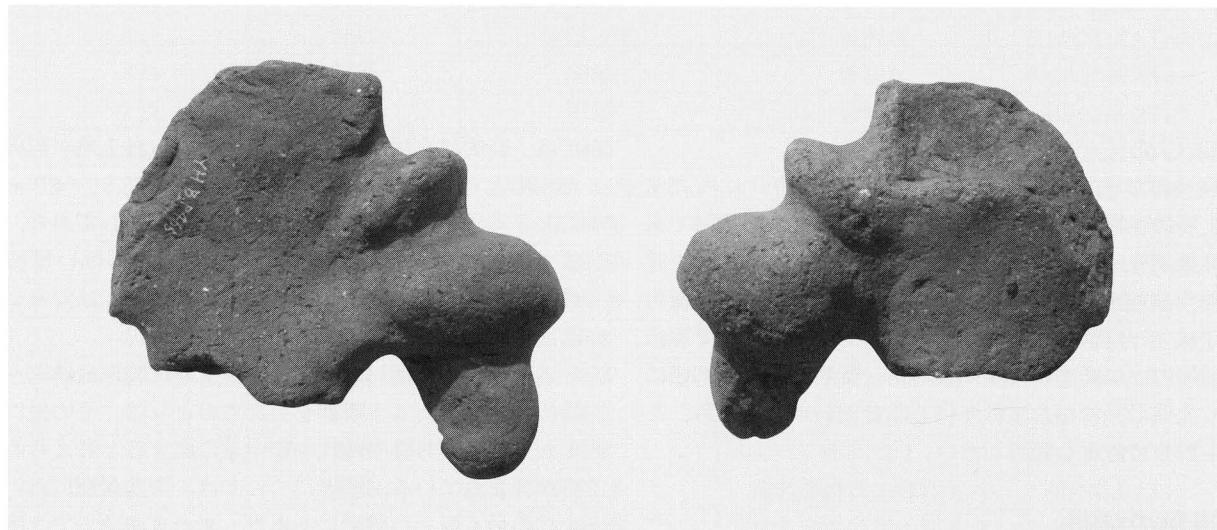
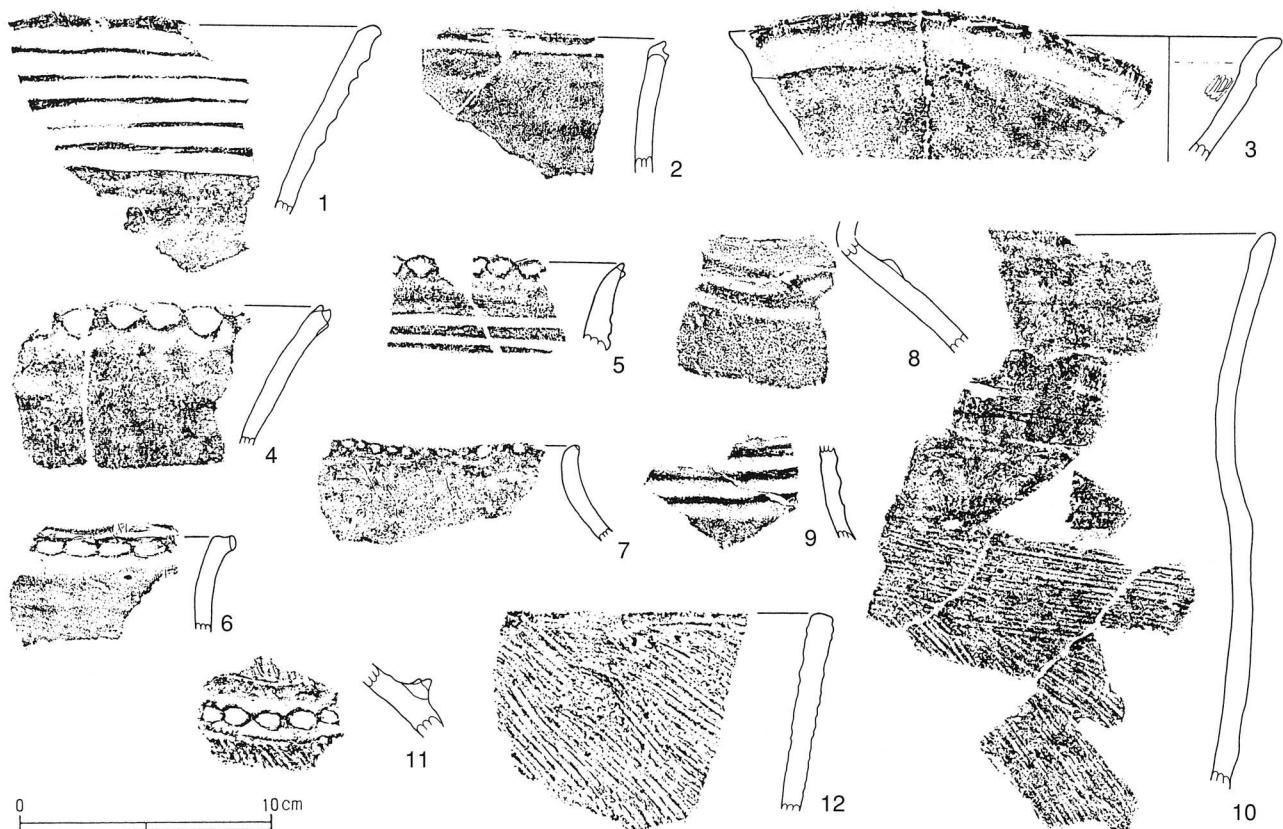
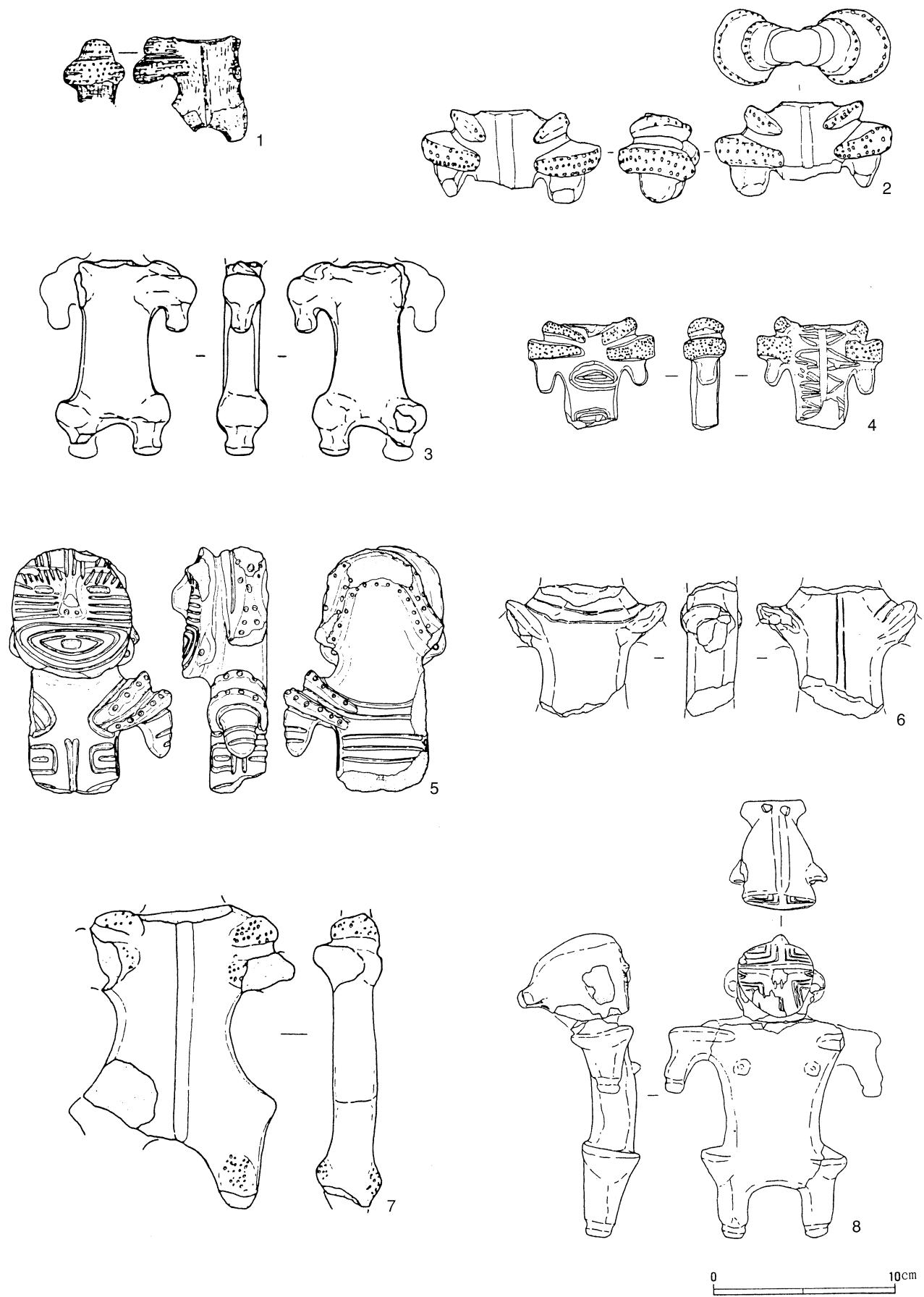


写真1 横堀遺跡出土土偶



第3図 横堀遺跡出土土器 (S = 1/3)



第4図 肩パット状の装飾をもつ土偶 (S = 1/3)  
 (1・氷、2・中島 A、3・青木沢、4・石行、5・伝上伊那郡出土、6・8・麻生田大橋、7・平井稻荷山)

相としては、「縄文時代晩期最終末の浮線文土器群の中に条痕文土器が流入し、混在する段階」～「前段階まで伝統的に継承されてきた深鉢・浅鉢を主体とする土器組成から、甕・壺を主体とする土器組成へと変化する段階」と捉えることができる。

遺跡からは住居跡・土坑など、生活の痕跡を直接的に示す遺構は発見されなかったものの、2,000点を上回る土器や石器が発見されている。

遺物は調査区南半分を中心に出土しており、遺物を包含する黒褐色粘質土は調査区北半分では徐々にシルトがかった鉄分を多く含む層に変化し、同時に遺物の出土も見られなくなる。なお、土器や石器とともに出土した炭化物の小片について<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ、補正年代値で1960±40y.B.P.という結果が得られている。

遺物の分布状況については20mほど離れて出土した土器片間に接合関係がみられ、また石器の分布には器種ごとに偏りがみられるなど、単なる遺物包含層としての性格のみでは捉えきれない要素をもっている。

### 3 横堀遺跡の土偶とその類例

報告書の中で縄文時代の土器片として載せた遺物が1点あるが、これが土偶の一部であることがわかった（第2図・写真1）。残存部位は左腕のみが残った胸部～腹部にかけての部分にあたり、腕の割には胴体部分がきわめて細く作られている。肩から腕にかけては平行する2段の隆帯によって立体的に作られているが、これがいわゆる肩パッド状の装飾である。この装飾以外には文様などは全くみられない。色調は橙褐色で胎土には白色粒子、黒・金雲母を少量含んでいる。焼成は良好である。土偶は他の多数の土器片や石器とともに見つかっているが、特に遺構に伴っているものではない。出土地点はG-4グリッドで、ここは調査区の中でも遺物が多く集中してみられる場所である（第1図）。

横堀遺跡でみられるような肩パッド状の装飾をもつ土偶は中部高地を中心として分布することが知られているが、長野県水遺跡・中島A遺跡・青木沢遺跡・石行遺跡・伝上伊那郡出土例、愛知県平井稻荷山遺跡・麻生田大橋遺跡などで類例がみられる。水遺跡・青木沢遺跡例（第4図-1・3）は肩部分がこぶ状に隆起しており、水遺跡のものはこの部分と腕部分に刺突が施されている。中島A遺跡例（第4図-2）は肩部分に刺突を施した隆帯が2段付けられている。石行遺跡例（第4図-4）は肩部分に2段の隆帯があり、ここに刺突が施される。また胸部～腹部にかけてと背中には沈線による文様が描かれている。平井稻荷山遺跡例（第4図-7）は肩から腕部分にかけて2段の隆起をもち、この隆起部分に刺突が施される。横堀遺跡例は残存部位が少ないが、他の遺跡例を見ると、肩パッド状の装飾をもつ土偶は腰部についても張り出しをもち立体的に作られているものがみられる（第4図-3・7・8）。頭部についてみると伝上伊那郡出土例（第4図-5）では、口の周りや頬、

額に数条の沈線文が左右対称に施された顔面をもつ、いわゆる有鬚土偶と呼ばれるタイプである。麻生田大橋遺跡のものは顔面に沈線によってL字状の文様が施されている（第4図-8）。岡本茂史氏は平井稻荷山例の土偶について、「ややなで肩の肩部に刺突を施した隆帯が貼付され、鋭角的に強く張った腰部を有するものは安行式土偶に系譜が求められる可能性がある。」としている。

縄文時代晩期最終末～弥生時代中期頃までにかけてみられる土偶については、東北地方の結髪形土偶・刺突文土偶や中部地方を中心に分布する有鬚土偶など地域によって様々な形態の土偶が存在する。山梨県内では該期の遺跡については細かいものまで含めるとおよそ70箇所が確認されているが、土偶が見つかっているのは横堀遺跡と金の尾遺跡の2遺跡のみである。金の尾遺跡例については弥生時代後期の住居跡からの出土であるが、住居跡内の覆土中から水神平式の土器片が出土していることから、時期的にはこれに伴うものと考えられる。とすれば横堀遺跡例は条痕文期の土偶としては県内で最も古いものに位置づけられる。

### 4 おわりに

今回は横堀遺跡の土偶について再報告するとともに、周辺地域の類例を挙げる中で単なる比較をするにとどまった。該期の土偶については、その特徴として縄文時代的性格をもつ部分と縄文時代的な性格が失われ、土偶祭祀自体が変質する部分について説かれことが多い。縄文時代を通じて存在し続けてきた土偶は、弥生時代中期に至ると容器形土偶・人面付壺へと移行し形態的にもその用途面からも縄文色が払拭される。横堀遺跡例はちょうどその過渡期の土偶にあたるが、この過渡期のなかで土偶がどのように変質していったのか、またその要因は何であったのか、考えていくべきことは数多い。今後の課題である。

本稿を草するにあたり、小野正文氏、中山誠二氏にはご教示いただいた。記して感謝いたします。

### 〈参考文献〉

- 宮下健司 1983「縄文土偶の終焉」『信濃』35-8  
荒巻実・設楽博己 1985「有鬚土偶小考」『考古学雑誌』71-1 日本考古学会  
中山誠二 1992「宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の土器群」『宮ノ前遺跡』 萩崎市遺跡調査会  
岡本茂史 1993「東海地方西部における縄文晩期土偶」『突帯文土器から条痕文土器へ—伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり—』突帯文土器研究会  
佐藤嘉広 1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』81-2 日本考古学会  
山梨県埋蔵文化財センター 2001『横堀遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第184集